

渡辺実 (一九〇一) 『国語意味論』 増書房

渡辺実編 (一九八三) 『副用語の研究』 明治書院

〔付記〕 本稿は、平成二十三年度科学研修費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部である。

換喻と名づけ

——換喻とエポニムの定着の比較からみた——

大田垣 仁

本稿では、人名をそれとは別の対象の指定に用いる言語現象について注目する。この現象に該当する例として、換喻と換称がある。換喻とは、ある言語表現をそれと密接に関わる別の表現で表す修辞技法である。換称とは、固有名の代わりに同類一般を表す名称を用いたり、同類一般を表すために固有名を用いる修辞技法である。後者は特にエポニムと呼ばれることがあり、本稿では換称のなかでも特にこのエポニムについて注目する。

本稿の目的は、メンタル・スペース理論の枠組みにしたがって、名詞の関数的な側面、すなわち名詞を名詞の意味が表すカテゴリーとその成員の関係として捉えることで、人名が用いられる換喻とエポニムの共通点と相違点について分析することにある。これらは一見、人名が別の対象の指定に用いられている点が似ている。しかし、名づけとその名づけの定着の観点からみたばあい、これらふたつには顕著な違いがあることを述べる。

本稿の構成は次のとおりである。二節で本稿で分析の対象とする換喻および換称について記述的観察を行なう。三節で本稿で分析に用いる道具たてとして、筆者が依拠するメンタル・スペース理論における名詞句の捉え方にについて概観し、それを換喻の分析に用いるための拡張を行なう。四節で二節で観察した言語現象について三節で

示した枠ぐみをもとに分析を行なう。五節で結論を述べる。

二 言語現象の観察

ここでは、本稿の分析の対象となる人名がそれとは別の対象の指定に用いられる例について記述的観察を行う。人名を用いる別の対象の指定は換喻および換称とよばれる言語現象にみられる。以下では、まず典型的な換喻における臨的な名づけについて概観し、さらに人名が用いられる換喻について観察する。次に人名が用いられるカテゴリ化した言語表現として換称を中心とした日本語のエポニムについて観察する。

二・一 換喻

まず、換喻による間接的な対象の指定について観察する。典型的な換喻による対象の指定の例をみたのちに、本稿の分析対象のひとつである人名が別の対象の指定に用いられる換喻について観察する。

二・一・一 典型的な換喻

次に示すように、典型的な換喻は、ある限られた状況において、固有名がわからない対象を指定するための臨的な名づけを行なうときに用いられる。^[注1]

(1) a かつ丼（を注文した客）が食い逃げした。（飲食店）

b 例の眼鏡が（……）黒板の字を凝視している。（若き数学者のアメリカ）

d 髪は声をひくくして園とのいきさつを尋ねた。（道化の華）

さらに、次に示すように、由来は何であれ、料理名や大事件の名称として、臨的な名づけが定着し新たなカテゴリーを生み出すことがある。この現象を本稿ではカテゴリ化と呼ぶ。

- (2) a 昨日は鍋を食べた。
b 今日のお昼はどんぶりにしよう。

c 「ヒロシマ、ナガサキを普遍化したい」（中国新聞二〇〇三年七月三〇日）

d 「ハイジャックできない飛行機」は新たに9・11を防げるか？（ロイター・二〇〇六年八月二一日）

二・一・二 人名を用いる換喻

一方、これまで換喻とよばれてきた類型の中には人名が対象の指定に用いられることがある。それは次に示す「作者で作品を表す」とよばれる類型である。

- (3) a 夏目漱石が三番目の棚に並んでいる。
b 美術館にピカソが展示されている。

これらのは、佐藤（一九七八）や Lakoff and Johnson（1980）などの先駆的な比喩研究において、作者の名前でのその作者の著作や絵を間接的にあらわす、典型的な換喻の一種とみなされてきた。しかし、筆者はこれを典型的な換喻とは成立のメカニズムがことなる、換喻もどきであると考える。この点については三節で改めて考察する。

二・二 換称・エポニム

次に、換称を中心としたエポニムについて観察する。佐藤（一九七八：一七）によれば換称とは次のように規定される。

(4) 種による提喻のうちのある極端な形式には、古典レトリックにおいて、特別の名称が与えられていた。それは《換称》すなわちアントノマーブ（アントノメイジア）である。（……）固有名の代わりに同類一般を表

す名称を用い、あるいは逆に、同類一般を表すために固有名を用いる、提喻の一種である。

さらに佐藤（一九七八）によると、換称には、「ゴータマ（お釈迦様）を「ブッダ（さとつた人）」と呼び、イエスを「キリスト（救世主）」と呼ぶような「類による換称」と、日和見主義者を「筒井順慶をきめこむ」といつたり、偽善者をモリエール作の登場人物の名を借りて「タルチエフ」と呼ぶ、「種による換称」がある。

本稿ではこれらの中でも「人名が用いられる種による換称」を扱う。この類型は特に「エポニム」（名親）の一種と考えられる。『英語エポニム辞典』の解説によれば、エポニムは大きく分けて次の三つがあるという。

- (5) a 実在の人物の名前に由来するが、固有名詞の特色を失い、小文字で表記されるにいたつている語彙。
b 實在の人物、またはその人物の作品・著作などの特色を示す語彙。
c 神話・伝説上の人物、または架空の人物の名前に由来する語彙。

以下では、実在または架空の人物に由来すると考えられる例について観察する。大田垣（二〇〇九）で使用した抽出方法を踏襲し、『日本国語大辞典第二版オンライン版』から「～たことから」「～たところから」「転じて」などの検索キーを用いて抽出した日本語のエポニムの例を以下に示す。

抽出された日本語のエポニム表現には大きく分けて「ある事物のはじまりとなる人物」と「ある事物の代表者」の二種がみられた。さらにこれらの下位類として「ある事物の創始者・導入者・発明者」と「ある道具の使用の代表者やある事物の代表例」がそれぞれ確認できた。これらの動機づけとしては、Lakoff (1987) が指摘した、カテゴリーにおけるプロトタイプ効果が考えられる。これは、あるカテゴリーの代表的（典型的）な成員が、そのカテゴリー全体を表す表現として使用される、人間の知覚上の特性のことである。

まず、「ある事物のはじまりとなる人物」がエポニムの由来として用いられるものとして次の例がみられた。

- (6) a 川柳・柄井川柳が代表的存在であったことから、短詩型文学のことを行う。〔創始者〕

- b 侘助・詫助・秀吉の朝鮮戦争のときに従軍した侘助という人物が持ち帰ったことから、ツバキの品種のことをいう。〔導入者〕
c 相州正宗・鎌倉時代後期の刀工、岡崎正宗のこと。(……)また、その鍛えた刀をもいう。〔発明者〕
次に、「ある事物の代表者」がエポニムの由来として用いられるものとして次の例がみられた。
(7) a 余市・与市・仮名手本忠臣蔵で山崎街道の与市兵衛が所持していたところから、(縞の)財布のこと。
b 安珍・『安珍清姫』の伝説で清姫が帯の解けたのもかまわいで安珍を追つたところから女帯をいう。〔以上、道具使用の代表者〕
c 曽我・曾我兄弟が貧乏であったところから、貧乏のことを行う。〔ある事物の代表例〕
d 竹斎・『竹斎』の主人公の名前から転じて、やぶ医者のこと。〔ある事物の代表例〕
以上、換称のなかでも特に人名を由来とする日本語のエポニム表現と考えられる例について概観した。

三 分析の道具だて

ここでは本稿の分析の方法とその道具だてについて述べる。本稿では名詞（句）のふるまいをメンタル・スペース理論にもとづく関数的な側面から分析する。そのための中心的な基本概念である、スペース・役割・値、コネクターとアクセス原理について整理する。

係としてとらえる。スペースとは、井元（11001）によれば、「述定の対象となる最小の心的表象が存在し、述定による属性を保持していると考えられる領域のこと」（116頁）である。役割とは、Fauconnier（1985）の訳者の解説によれば「名詞句の記述内容が与える関数で、時間、状況、コンテキストやその他諸々のものを変域とし、記述を満足する個体の集合を値域とする関数」（144頁）のことである。値とはスペースが役割関数に変域として代入されることで限定される名詞句の指示対象である。役割による値の限定がメンタル・スペース的にみた名詞句の指示である。

また、文の記述する内容が、名詞句の役割に帰着されるとさの解釈を役割解釈といい、値に帰着されるとさの解釈を値解釈という。たとえば、次の例で、

（8）一九二九年当時、大統領は赤ん坊だった。*(Fauconnier 1985 を翻訳)*

この文では、話し手がいる現在スペースに対して、「一九二九年当時」というスペース導入表現によって一九二九年スペースが設定される。現在スペースと一九二九年スペースのそれぞれに注目したとき、この文は次の四つの解釈の可能性をもつ。

（9）a 現在・値解釈：現在大統領の職務についているある特定の人物は一九二九年当時、赤ん坊であった。
 b 現在・役割解釈：誰であれ現在大統領の職務についている人物は一九二九年当時、赤ん坊であった。
 c 一九二九年・値解釈：一九二九年当時、ある特定の赤ん坊が大統領の職務についていた。
 d 一九二九年・役割解釈：誰であれ一九二九年当時の大統領は赤ん坊がその職務についていた。

以上の例では、ふたつのスペースにおかれれた大統領と赤ん坊という役割の成員である値が同一性コネクターによって対応づけられている。このようなスペース内の要素を結びつける装置をFauconnierはコネクターと呼ぶ。あるスペースに存在する要素がコネクターによって別のスペースに存在する要素を指定するはたらきをFauconnierは次のように説明する。

（10）一つの要素 *a* と *b* がコネクター *F* によってリンクされていれば (*b* = *F* (*a*))、要素 *b* はその対応物 *a* の名前か記述か指さしかにより同定である。*(Fauconnier 1997 を翻訳)*

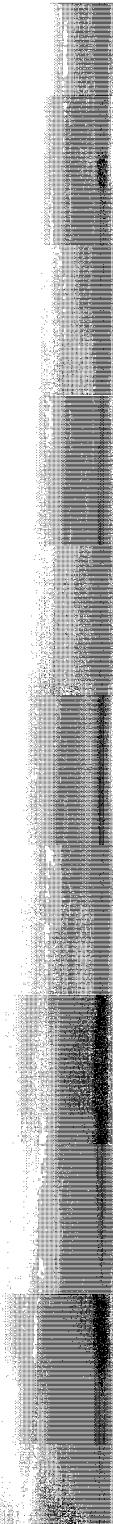
談話構成上の自然さからみて不自然なものは排除されるが、主語や目的語などの文の指示的位置に現れる名詞句はコピュラ文^{〔註3〕}に代表される言語そのものについて言及するメタ的な言明をのぞいて、役割解釈と値解釈をもつと考えられる（井元一九九五）。

三・二 换喻と語用論的コネクター

先の（8）の例において導入されたコネクターは異なるスペースに存在する同一の対象を結びつける同一性コネクターであった。一方、換喻にかかるコネクターは役割間に成立する語用論的コネクターである。これは、ある単一のスペースに存在する換喻によって表し表される対象（Fauconnierのいうトリガーとターゲット）を結ぶ社会的・心理的な関係性のことである。たとえば、「かつ丼が食い逃げした」という文では、スペースとして飲食店が設定され、かつ丼という本来料理を表す名詞の役割が、そのかつ丼を注文した特定の客を指定するために用いられる。この際に利用されるのが注文品と客との社会的な関係性である。

三・三 典型的な換喻と換喻もどき

以上、メンタル・スペース理論における名詞（句）の捉え方と、それを拡張した換喻の捉え方についてみた。ところで、筆者は換喻には典型的な換喻と、換喻もどきがあると考える。典型的な換喻は、換喻におけるトリガーとターゲットのあいだに語用論的コネクターが存在する。一方、換喻もどきには語用論的コネクターは存在



せず、名詞句の指示対象である値がもつ意味の総体の一側面に焦点があてられる」とが、語用論的コネクターにみえるものと考える（以下ではこれを「値の側面のすれ」とよぶ）。本稿で扱う人名を用いる換喻は、「これまで典型的な換喻の一種とされてきたが、実際は換喻と換喻もどきの境界に位置する例である。そして、ある名詞句の解釈が典型的な換喻であるかどうかは、次のテストフレームで確認する」ことができる。

- (11) a 名詞の意味の多面性に対する述語選択の自由度
b ターゲットの照応とコネクターの開閉
c 焦点移動

II・III・一 名詞の意味の多面性に対する述語選択の自由度

まず、名詞の意味の多面性に対する述語選択の自由度について、「学校」という名詞について考える。次の例は「学校」という名詞がもつ意味の総体を背景として、述語や文脈によってその意味の一側面に焦点があてられている。これはLangacker (1984, 1993) の考えに従えば、言語として文に現れている参照点と実際に活性化している領域がずれていることを示している。これをメンタル・スペース流に言いかえるならば、名詞句の指示対象である値がもつ意味の総体の一側面に焦点があてられているといふことになる。

- (12) a 岡の上の松林に囲まれて学校が建っている。「建築物」

b 学校を卒業してから十年になる。「制度」

c 流感が猛烈にはやって、ほとんど学校全体がやられた。「組織の成員」

d 学校は八時にはじまる。「授業」

(以上、国廣一九九七・五八一九)
従来、このような値の側面のずれの例も、換喻とみなされてきた。しかし、このような例は次の(13)に示すように、当該の名詞を文の主題にとつて、ひとつの文で表現することができる。すなわち、指示対象はあくまで

全体としての値（＝学校）であり、そこには語用論的コネクターは存在しない。

- (13) わたしが十年前に卒業したあの岡の上の松林に囲まれている学校は、普段は八時にはじまるが、流感が猛烈にはやつて休校になつていて。

一方で、「かつ丼が食い逃げした」のような典型的な換喻には、このような名詞の意味の多面性はない。なぜなら、トリガーとなる名詞にターゲットの意味はあらかじめ含まれておらず、間接的な指示は語用論的コネクターが介在することによつてはじめて成立するからである。

- (14) *そのかつ丼は特上ロース肉をつかい出汁がよくきいていたが、金を払わずに逃げてしまった。

II・III・二 ターゲットの照応とコネクターの開閉

Fauconnier (1985) は、換喻には開コネクターをもつものと閉コネクターをもつものがあることを指摘した。

開コネクターとは、コネクターがトリガーとターゲットの両方を可能な先行詞とし、かつ代名詞解釈の出力に適用できるコネクターである。閉コネクターとは、コネクターがターゲットだけを主たる可能な先行詞とし、代名詞解釈の出力に適用できないコネクターである。これは言い換えれば、ターゲットをトリガーを表す代名詞で受けられるか否かという条件になる。

- (15) a 開コネクター…プラトンは偉大な作家だ。彼は棚の一番上にある。

b 閉コネクター…マッシュルームオムレツは香辛料がききすぎていた。*それは支払いをせずに出て行つた。

これらの区別について、なぜ同じ換喻と呼ばれるものに二つの類型が存在するかについてはこれまで問題にされてこなかつた。しかし、この違いは換喻に二つの類型が存在することを示すのではなく、換喻と換喻ではないものとの違いを本質的に示していると考えられる。これまで典型的な換喻であり開コネクターとみなされてきた

「作家で作品を表す」例は、もともと作家の活性化領域が作品にまで拡張していると考えれば、作家本来のカテゴリーやコネクターを表す代名詞でそれをうけることができ、そこには語用論的コネクターは存在していない。一方、閉コネクターの例には語用論的コネクターが存在しており、トリガーとなる名詞の役割はターゲットを指定するための属性として用いられるとしても、トリガーの役割そのものは問題にはならず、トリガーを表す代名詞でターゲットをうけることができないのである。

ただし、より厳密に言えば「作家で作品を表す」例は、典型的な換喻と換喻もどきとの境界に位置する。つまり、作品の「内容」について言及するときは換喻もどきとなるが、書店や図書館などの限定された状況で「漱石は太宰の横にあつた」のような「物体としての本」を指定するときは語用論的コネクターが生じると考えられる。

三・三・三 焦点移動

最後に、焦点移動について述べる。これも作家で作品を表す換喻が実は換喻もどきの特徴をもつことを支持するテストフレームである。このテストフレームに該当する表現として次のような例が考えられる。

(16) a 私は夏目漱石が好きです。

b 私は夏目漱石を高く評価しています。

c 私は夏目漱石を研究しています。

これらの例については西村（二〇〇四）も同様の指摘をしているが、名詞句がトリガーである作家としての夏目漱石をさしているのか、ターゲットである漱石の著作をさしているのかが渾然一体として区別できない。これは、当該の固有名が作家としての属性をもつときに、可能となる表現である。

三・三・四 典型的な換喻と換喻もどきについてのまとめ

以上、これまで典型的な換喻とされてきた例について、語用論的コネクターが存在するものと、値の側面のずれが語用論的コネクターにみえるものがあることを指摘した。そして、臨時的な名づけに用いられる例は典型的な換喻と考えられる。また、作者で作品を表す例は値の側面のずれが生じる換喻もどきの例であると考える。

四 分析

ここまで、二節において換喻およびエポニムについて観察を行なった。次に、換称のなかでも人名に由来するエポニムの類型を日本国語大辞典第二版オンライン版をコーパス的に用いて抽出した。そして、三節において、本稿の分析の枠組みとなるメンタル・スペース理論による名詞の関数的な捉え方について基本的概念の確認を行なつた。さらに、これまで換喻とよばれてきたもののなかに語用論的コネクターが存在する典型的な換喻と、値の側面のずれが語用論的コネクターにみえる換喻もどきがあり、本稿で注目する人名を用いる換喻が後者に位置づけられることを述べた。

ここからは、二節で観察した換喻およびエポニムの例について、三節で示した分析の枠組みを用いて、典型的な換喻と人名が用いられる換喻およびエポニムに名詞句意味論的にみてどのような違いがあるかを分析する。

四・一 換喻およびエポニムにおけるカテゴリ化の有無について

換喻とエポニムは、ある言語表現を別の対象の指定に用いる点において類似している。しかし、その対象の指定が名づけとして定着するかどうかについては、違いがある。これは次のテストフレームを導入することによって区別することができる。

(17) a 「XというY」形式の使用可否

b 名詞句の役割解釈と値解釈のちがい

四・一・一 「XというY」形式の使用可否

金水（一九八二）によれば、メタ的な言語形式である「という」は、カテゴリーの包摂関係を表し、相手が知らない言葉を談話に導入する際に使用される。次の例は「田中さん」という個体や「ビーグル」という犬種が、その上位カテゴリーである「男性」や「犬」の成員になっていることを表している。

(18) a 田中さんという男性を知っていますか？

b ビーグルという犬を知っていますか？

さらに金水（一九九〇）によれば、「という」形式は、本来の名称にしかつかえず、換喻による臨時的な名づけはターゲットを間接的に指示することはあっても、トリガーとなる名詞をターゲットが表す潜在的な上位カテゴリーに包摂させることができない。

(19) *かつ丼という客がどこにいったか知りませんか？

しかし、臨時的な名づけが定着し新しいカテゴリーとして成立すれば、「という」を用いた表現が可能となる。

(20) 鍋という料理を食べたことがありますか？

このように、メタ的な言語形式である「という」を用いることによって、換喻やエポニムが介在した名詞でカテゴリー化が成立しているかどうかを区別することができる。

さて、先に示したとおり、換喻における臨時的な名づけでは「という」を用いることができなかつた。一方、人名を用いた換喻もどきも「という」を用いることができない。

(21) *夏目漱石という本を読んだことがありますか？

ただし、この換喻もどきの例で「という」が使用できないのは臨時的な名づけの例とは別の理由による。すなわち、換喻もどきではそもそも語用論的コネクターが存在しないためにターゲットが表す潜在的な上位カテゴリーに適用させて示す。

(22) a 一鍋、どんぶり という料理を食べたことがありますか？

b ピロシマ、9・11 という大惨事について知っていますか？

一方、臨時的な名づけが定着した例ではカテゴリー化が成立しているので「という」を用いた表現が可能である。

リードが設定されない。これにより「という」を用いたテスト自体が成立しないのである。

一方、臨時的な名づけが定着した例ではカテゴリー化が成立しているので「という」を用いた表現が可能である。

(23) a 川柳という短詩型文学を知っていますか？

b 侘助というツバキを知っていますか？

以上のように、「XというY」形式を用いて、換喻やエポニムが介在した名詞のカテゴリー化の有無を判断することができる。

四・一・二 名詞句の役割解釈と値解釈ちがい

次に、換喻および換称が介在した名詞の意味のカテゴリー化について、その違いが名詞句の役割解釈と値解釈の違いにもあらわれることを述べる。

四・一・二・一 カテゴリー化がおきない類型と役割解釈・値解釈

まず、臨時的な名づけに代表される典型的な換喻は、値解釈が優先されて役割解釈を行なうこと�이다. たとえば、「かつ丼が食い逃げした」という例では、飲食店などの限定された状況において、「かつ丼」という役割は、注文品とそれを注文した客という社会的な関係性を背景として、そのかつ丼を注文した特定の人間を指定するためだけに利用されている。

注

(1) 換喻が介在した名づけの詳細な分析については大田垣(二〇〇九)を参照されたい。

一方、値の側面のそれが語用論的コネクターにみえる換喻もどきでは、名詞句の解釈において役割解釈を行うことが可能である。たとえば、「私は昨日、夏目漱石を読みました」という文では、夏目漱石が書いた著作であれば何を読んでも同じ事態として認識される。これはまさに役割解釈そのものである。この類型は、本来、語用論的コネクターが存在していないので、一般的な名詞と同様に役割解釈を行なう可能性をもつていて。

四・一・二・二 カテゴリー化がおきる類型と役割解釈・値解釈

一方、典型的な換喻において、臨時の名づけがカテゴリー化した例では名詞句解釈において役割解釈と値解釈の両方が可能となる。たとえば「鍋」という名詞は、実際の談話に導入されたときに、特定の値を指定する、「昨日食べた鍋はおいしかった」といった文や、「冬は鍋に限る」といった鍋料理に該当するものであれば何であってもよい役割解釈の文が可能である。これは、いつたんカテゴリー化が成立してしまえば、もとの名詞と同じ名称をもつ異なる意味をもつ名詞、すなわち同音異義語が生まれるということである。カテゴリー化が成立したのちは、共時的にはその名詞はもはや換喻ではなく、一般的な名詞として役割解釈と値解釈の可能性をもつことになるのである。

次に、人名を由来とするエポニムも、カテゴリー化してもとの名詞とは別のカテゴリーを形成する。いつたんカテゴリー化が成立してしまえば、エポニムはもとの名詞とは同音異義語の関係になるので、一般的な名詞として役割解釈と値解釈の両方の可能性をもつ。

- (24) a 役割解釈：「川柳」は日本の諷刺詩である。(文芸的な余りに文芸的な)
 b 値解釈：本日、日本経済新聞／(に)いくつか掲載されていた川柳の中で、この川柳が私には一番印象に残りました。(ビールの売り子日記：二〇一一年五月一五日)

四・一・三 換喻および換称のカテゴリー化について的一般化

以上、換喻およびエポニムによる名詞の意味のカテゴリー化について分析を行なった。ここまで分析を一般化すると次のことが言える。

- (25) a 臨時的な名づけに代表される典型的な換喻のなかには料理名や、大事件の名称としてカテゴリー化するものがある。一方、人名が用いられる換喻もどきではカテゴリー化は生じない。
 b エポニムの例は人名を由来としつつ、その人名によって指定される新しいカテゴリーを形成する。

五 おわりに

以上本稿では、人名をそれとは別の対象の指定に用いる言語現象について、人名を用いる換喻と換称を中心としたエポニムについてメンタル・スペース理論にもとづく名詞の関数的な側面に注目し、次の分析を行なった。まず、これまで換喻とよばれてきたものが、語用論的コネクターをもつ典型的な換喻と、値の側面のそれが語用論的コネクターの存在にみえる換喻もどきがあることを指摘し、人名を用いる換喻が基本的に後者に位置づけられることを述べた。

次に、名詞のカテゴリー化について注目したときに典型的な換喻の一部やエポニムがカテゴリー化して新たなカテゴリーを生み出す現象であるのに対しても、人名を用いる換喻もどきがカテゴリー化して新たなカテゴリーを生み出すことがないことを指摘した。

(2) 作者で作品を表す例の類例として、「昨日はサントリ一ーを飲んだ」「彼はアップルを使つてゐる」のような製造元の名前で製品を表す例がある。これも値の側面のずれによる擬似的な換喻と考えられるが人名ではないために今回の分析からは除外している。

(3) ハジュラ文では役割のみが表現されることがある。たとえば指定文の述語や指定文の主題は役割の属性のみを表現する、値を欠いた表現である。

参考文献

- 井元秀剛（一九九五）「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』二一、九七一—七、大阪大学大
学院言語文化研究科
- （1990）「スンタルスベース理論における定名詞句の指示について」『言語における指示をめぐって』（言語文
化プロジェクト）（1990），一一—一五、大阪大学大学院言語文化研究科
- 大田垣 仁（1990）「指示的換喻と意味変化—名前転送における語彙化のパターン」『日本語の研究』（五四），一一一
四六、日本語学会
- 加茂正一（一九四四）『新語の考察』、三省堂
- 金水 敏（一九八六）「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論文集』、四九七—九〇、明治書院
- （一九九〇）「役割」についての覚書』『いのほの饗宴—覚書雄教授還暦記念論集』、三五一—六一、くろしお出版
- 國廣哲彌（一九九七）『理想の国語辞典』、大修館書店
- 佐藤信夫（一九七八）『ハーリック感覚—いのほは新しい視点をひらく』、講談社
- 西村義樹（1990）「換喻の言語学」『ハーリック連環』、八五—一〇八、成蹊大学文学部学会編、風間書房
- Fauconnier, G. (1985) *Mental Spaces*, Cambridge University Press. (邦訳) 坂原茂・水光雅則・田達行則・三藤博 (訳)
- （1997）*Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1984) Active Zones, *BLSI*. 172-88.



———（1993） Reference-point constructions, *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38. Walter de Gruyter.

辞書：英語エボニム辞典（シリル・ゼーチング著、横山徳爾訳、北星堂書店、一九八八年）／日本国語大辞典第一版オノハ
イン版（小学館）

用例出典：青空文庫：芥川龍之介『文芸的な余りに文芸的な』／太宰治『道化の華』／新潮文庫の10冊：藤原正彦『芸能文
学者のアメリカ』／ウェブサイト：『中国新聞』（chugoku-np.co.jp）／ロイター（jpt.reuters.com）／『』一
ルの売り子日記』（ameblo.jp/urikojournal-intime）

国語語彙史の研究 三十一

平成二十四年三月三十日初版第一刷発行

(横印省略)

編 者 国語語彙史研究会

発行者 廣 橋 研 三

印刷所 亜 細 亜 印 刷

製本所 渋 谷 文 泉 閣

発行所 (有限) 和 泉 書 院

〒543-0037 大阪市天王寺区上之宮町七一六

電話 ○六一六七七一一一四六七

FAX ○六一六七七一一一五〇八

振替 ○九七〇一八一一五〇四三

本書の無断複製・転載・複写を禁じます